チリ・パタゴニア1968-69 ──ある学生探検の記録　第3回

チリ・パタゴニアへ

安成哲三　やすなり　てつぞう
名古屋大学地球水循環研究センター(気象学・気候学，地球環境学)

イラスト＝安成　晶

この連載は，現在の私ではなく，35年前に学生だった私の書いた記録である．当時，京都大学探検部に所属する学生であった私は，仲間の2人と南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち，そして2年近くを費やして1968年にようやく実現した．帰国後，私はその探検の報告を約半年かけて書き上げた．内容は，探検の思い立ちから帰国まで，私たちは何をやり，何を見聞きし，そして何を考えたかを，あくまで私自身を通して記したものであるが，いくつかの不運が重なり，結局，そのまま35年間，眠り続けることになってしまった．今回，1960年代末の学生による「探検」の記録として，ほとんどそのまま『科学』に，十数回に分割して掲載していただくことになった．

前回(第2回，5月号)は，私たち学生3人が計画書を引っさげて奔走し，中島教授を隊長に口説き，探検部でも正式の計画として認められて，出発へ向け準備をする過程を報告した．もちろん最大の難関は資金であった．ボリビアに向かう栽培植物調査班と合わせて，当時(1968年)で約1000万円の資金が必要であった．観測・調査の準備や訓練の合間，私たちは半年間，ひたすら募金と物集め活動に奔走した．このような膨大な作業を強いられる過程で，個人の夢と発想から始まった「探検」は，社会の中での意義や位置づけを問われつつ実現せねばならぬひとつのプロジェクトであることも，私たちは学んだ．さいわい，京都には，多くの登山や探険の蓄積と，そして何よりもこのような学生の活動を理解し許容する雰囲気があり，いざ動き出すと，さまざまなかたちでの支援と協力が得られた．発案(思いつき)からまる2年，私たちはようやく出発にこぎつけた．今回は，日本を出発し，「憧れの」チリ・パタゴニアにやっと足を踏み入れるまでを報告する．

太平洋を渡る

船は単調に，南米チリ北部に向けて走っている．日本から南米まで，いわゆる大圏コースをすすむ．太平洋をほぼ円とみると，そのちょうど直径にそっていくようなものだから，まさに大洋のドまん中を通るわけである．途中，ハワイ諸島をかすめたほかは，島かげひとつ見えぬ，まる1月の航海だ．

船内生活も，まわりの海同様，単調だった．午前8時，朝食．朝食後，毎日，時計を航海時に合わせて，約20～25分すすめる．12時，昼食．おかげで，朝食と昼食の間が1日ごとに短くなり，昼食の食欲はだんだんなくなってくる．

11月12日．北緯28度，西経162度付近．船はほぼ東南東の方向に進んでいる．亜熱帯高圧帯に近づいたのか，風も弱く，なま暖かく湿っぽい．夕食は，にぎりずしと茶碗むし．夜中，ブリッジにあがる．北西方向に，水平線から少し上のところに，ちょうど弦を水平にした上弦の月がうかん

図1——チャナラルからプエルト・エデンへの行程. 太線内がチリ.

でいる．いつも日本で，ななめにかげった月しか見たことのないぼくの眼にとって，上半分がきれいにかげった半月は，感動的だった．日本を離れたんだという実感がはじめてぼくをおそってきた．

海はあくまで穏やかで，月光に，波がきらりきらりとひかっている．ブリッジの双眼鏡で，暗い星空を見あげる．びっしりとひしめきあうように輝いている星，星，星．船の進行方向には，ここ数日間，船のゆく道をあたかも示しているように，シリウスが一段と強く輝いている．ブリッジの上のレーダーマストが，ヒューヒューと風をきってうなっている．すべてをなぐさめてくれる静寂と神秘が，大洋と星空の夜にはある．

11月29日．いよいよ，南米大陸につく日だ．入港地は，チリ中北部の小港チャナラル．船はペルー寒流を横ぎるかたちで進んでおり，気温も，昼間で20°C前後にさがってきた．うすら寒い．ぼくたちだけでなく，船員の人たちも落ちつかぬようすだ．午後8時，レーダースクリーンのはしの方に，大陸がかかってきた．やがて，前方に，点々と町の灯がうかびあがってくる．双眼鏡で見ると，灯はきれいに碁盤の目のようにならび，街灯だということがわかる．

全員，投錨・停泊体制にはいる．船はフル(全速力)からハーフ(半速力)に，そしてデッドスロー(微速)と速度を落していく．緊張するブリッジ，エンジンルーム，甲板の作業員，もう肉眼で走っている自動車のライトが見えるまでになった．チャナラル港の入口だ．やがて，午後11時40分，ガラガラッと大音響をたてて，完全投錨．1カ月ぶりにエンジンの音がやみ，久しぶりに，船は静かな夜をむかえた．多くの船員は，ともで集魚灯をおこして，イカ釣りをはじめた．1m近くもあるイカが次々とあがる．あがるたびの歓声．ぼくたちは，見物もそこそこに部屋に帰り，ビールを飲みながら，南米第1夜をじっとかみしめる．明日からは，どんなことが待ちうけているのか．

砂漠地帯での上陸

11月30日．いつも寝起きの悪いぼくも，今日ばかりは，目を覚ますと，すぐ着替えてブリッジにあがる．大陸だ．しかも，ほとんど樹木らしいものも見えない砂漠地帯だ．目前には，鉄鉱石を集積し，加工するらしい工場と，鉱石運搬用のローターのある岸壁があるだけ．チャナラルの町は，すこし離れた，湾の奥にみえる．この町は，チリ中部〜北部の砂漠化した海岸山脈が，内陸からの川によって，中断されたところにある．町の上の方を，内陸から鉄鉱石を運び出すためと思われる，粗末な軌道が走っている．町から北の海岸には，広大な砂浜がひろがっている．島国日本には，とても見られぬ大きさだ．ふと，船近くの海に目をやると，なにかが，パチャッと音をたてた．ペンギンだ．ここは南緯25度なのに，とおもったが，南からのペルー寒流にのって，この砂漠地帯にまで分布している．さらにペルーの海岸でも見られるという．

やがて，チリ人の人夫がどやどやと，ハシケで

あがってきた．船員から注意をうけて，個室のドアに鍵をかける．ものを取られる可能性があるからだ．世界のいろいろな港をまわった船員にきくと，港に入っても鍵をかけずにすむのは，日本の港ぐらいだそうだ．中米の港などでは，停泊時に，常に監視員をおいて気をつけていても，何か盗まれる．見つけて注意すると，平気な顔をして返す．これが普通だという．

サロン(士官食堂)へいくと，すでに代理店の人，税関吏，ポートマスターが来て，船長らが応待していた．ふと見ると，先発隊の井上治郎が来ているではないか．

ともかく，身のまわりの荷物をトランクにつめて下船する．もう鉄鉱石の積み込みは始まっており，甲板上は，鉱石の粉がとんで，もうもうたるほこりだ．通関や宿泊のことは，30年もチリに住み，このチャナラルで鉱山関係の仕事をしておられるKさんという方がずっとつき添って面倒を見てくださり，何の問題もなかった．

問題は，モーターボートとエンジンの陸揚げと輸送だ．午後，はしけを船に横づけし，まず，10ほどの梱包箱(ワイヤーバウンドボックスと称している)を綱でおろし，箱にはいったエンジンも同様におろす．といっても，こういった鉱石専用船には，ふつうの貨物船のようなクレーンがなく，ひと苦労だ．横にとび出たブリッジに滑車をとりつけ，ワイヤーをかける．下の甲板の荷物をそれでひき上げ，船腹をはうように，下のハシケにおろす．重さ200 kg，長さ5 m余の木わくにはいったモーターボートは，船員と人夫総出だ．甲板の手すりとボートにはさまれそうになりながら奮闘してくれる．鉱石のもうもうたるホコリで，時々，目もあけていられなくなるような中で．やっと，波で揺れるハシケにのった時は，皆，まさに重荷がおりたといった感じだった．「かえりも乗ってええけど，ボートだけはごめんやぞ」船にわかれをつげた時，一等航海士に言われた．船員の方々には，ほんとにお世話になった．

陸に揚げ，通関を済ませ，サンチャゴへ向けての輸送のてはずも，Kさんのおかげで，ほとんどぼくたちはなにもせずにスムーズに進んだ．多くの遠征隊にとって，通関はいつもうるさい問題だ．とくに，チリはやっかいだ．保証金を積まされるぞと，今までのチリにきた日本隊にきかされていた．が，ぼくたちの場合，Kさんが税関吏と友達ということだけで，事なく済んだ．

あとの輸送は2人にまかせて，ぼくはひとりで，先にサンチャゴへ，連絡のためにたつことになった．チャナラルから，海岸砂漠をつっ走ってカルデラをへて，コピアポへ．コピアポは，緑の木々に囲まれたきれいな町だ．

コピアポから夜行の長距離バスで，パン・アメリカン・ハイウェイをひた走り，首都サンチャゴへ向う．

パン・アメリカン・ハイウェイとは，アメリカ合衆国が1940年代から50年代にかけて，中南米諸国援助のひとつとして建設したものである．合衆国から，メキシコ，中米諸国を経てパナマへ，さらに南米のコロンビア，エクアドル，ペルー，チリと，太平洋岸に沿って走り，チリ・パタゴニアの入口プエルト・モントで終わる全長約2万6000 kmの大ハイウェイである．「援助」にしては，えらく気前がいい．が，合衆国の中南米支配を維持するため，と考えれば理解できる．「すべての道はローマに通ず」，か．

ともあれ，細長いチリを貫く唯一の幹線道路には違いない．

チリの旅客輸送は，ほとんどバスに頼っているといえる．汽車もあるにはあるが，その遅さは抜群である．たとえば，サンチャゴ—チャナラルは，バスなら1日そこそこだが，汽車に乗ると，まる3日かかる．バス網は，チリのみならず，南米大陸全体に発達している．だから，コピアポ—サンチャゴ(約600 km)は，日本的感覚でこそ長距離だが，チリ人にしてみれば，せいぜい中距離だ．パン・アメリカン・ハイウェイを，サンチャゴからエクアドルの首都キトーまで約5000 kmを，1週間で突っ走るバスもある．

12月2日，朝早くサンチャゴに着く．飛行機で先着している中島暢太郎，寺本巌両氏の宿泊先，ホテル・リッツへ．

夜，久しぶりに，3人で夕食をとる．チリ名産のビーノ(ブドウ酒)は，あっさりとして，ちょ

っとすっぱく，いくらでも飲める感じだ．

軍艦「アギラ」号で南へ

ぼくたち2人が着く約1カ月前に，飛行機で寺本氏が，船で井上治郎，伊藤隆の2人が，すでにチリに着き，あらゆる交渉，手はずをととのえていた．なかでも，日本ではどうにもならなかった海軍の船に便乗*1の交渉はぼくたちの探検が可能か否かの大きなカギをにぎっていた．

寺本氏はまず，日本大使館に海軍の件を相談した．が，「それはちょっと無理でしょう」と否定的だった．ともかく海軍までついてきてくれと頼みこみ，ようやく，大使館員1人と国防省へいった．相手の反応は，意外と好意的だった．「あの辺はわれわれチリ人でもいってないところだ．それに，あなたがたの国のためにもなる仕事だろうから，協力しましょう」との返事だった．が，確約はまだとれず，後日，中島隊長が着いてから再び訪ねるということになった．担当の役人に，別れ際，寺本氏は，自分のネクタイにつけていた真珠のネクタイピンを，日本からのおみやげだといってさしあげた．と，どうだろう．かの役人，「ちょっと待て」という．しばらくして「じゃ，乗せましょう」とあっさり決まった．その後，空軍気象局長に隊長が会い，ベースキャンプ設置予定のプエルト・エデンにある気象観測所使用の協力も得た．

12月9日．チリ海軍の大型LST*2(約2000 t)の「アギラ」号はバルパライソ港を出港した(「アギラ」とは，鳥の「ワシ」のことである)．ぼくたちのボートや装備，食糧，そしてエンジン用に購入したドラムかん10本のガソリンもすべて積みこまれており，ぼくたちはただ乗りこむだけだった．「アギラ」号は，一路南下して，マジェラン海峡に面したプンタ・アレナスへと，世界最南の町といわれるポート・ウィリアムズの海軍基地まで物資補給にいくのだ．

*1 チリ・パタゴニアへの人と荷物の輸送は，チリ海軍の艦船しかないとの情報を私たちは日本で得ていた．

*2 上陸用舟艇のこと．

ところで，この船の便乗者はぼくたちだけかとおもっていたら，なんのなんの．ほかにたくさんの乗客が乗っている．なかには，年ごろのかわいい女の子まで乗っている．

チリ海軍の南へ行く軍艦は，プンタ・アレナスへいく数少ない船として一般の人々に開放されているようだ．

「アギラ」号が岸壁から離れたとたん，トランクを持ったひとりの男が，岸壁にかけ込んできた．彼は必死になって，船に叫び，大騒ぎしている．どうやら乗りおくれたらしい．かわいそうに，と思って見ていると，彼は，小さなランチに乗って追いかけてきた．付近にいた水兵が見かねて，助け舟を出してくれたのだろう．すでにスピードを上げ出した「アギラ」号にやっと追いつくと，甲板からロープとなわばしごが下される．男は悲壮な顔をして，すばやくトランクをロープの端にゆわえる．そして，なわばしごにしがみつく．ロープが長すぎて，トランクが海にはまり，ひきずられるかっこうとなる．艦上の乗客はドッと笑う．海にはまったトランクと，なわばしごにしがみついた男の悲壮な顔が組み合わさった哀れさがかえって，笑いの種となってしまう．

やっと甲板にはい上がってきたふとった中年男は，若い将校のお目玉をくらう．大の男が，と思うほどしょげきっている．

このハプニングが終った時，船はすでに港内を出つつあった．

ぼくたちの食事は，他の乗客，水兵たちとちがい，士官と一緒であった．士官はみな英語がうまかった．部屋は，医務室のとなりの病人用の部屋がわりあてられた．医務室の衛生下士官(チリではプラクティカンテという)がひまをもてあまし，1日中，日本製トランジスターラジオを鳴らし，出入りする乗客や水兵たちとおしゃべりしている．食事時になると，消毒用のしゃ沸器でゆで卵をつくったりしていた．

艦上では，下士官，水兵，乗客をまじえておしゃべりの集まりがあちこちにできて，にぎやかだ．ぼくたちは，もっぱら，医務室付近にたむろする

人たちとカタ言で話した．話し相手に軍人が多いだけに，よく「日本の軍隊はどんなか」とか，「兵役は？」などとよくきかれた．こんな時，ぼくは，たいてい，「日本の憲法は軍隊を持つことを禁止している」「実際にはあるが，守ることだけを目的としている」などといちおう答えたが，なんとなくすっきりしない．ただ，兵役に関しては，「日本はみな志願兵だけだ」というと，多くの水兵や乗客がうらやましがる．これは言う方もすっきりする．

12月10日．夕方，「アギラ」はタルカワノという軍港に入った．ここは，チリ南部最大の工業都市コンセプシオンのすぐ近くだ．ここで，船はタンカーから給油を受ける．ぼくたちはそろって，この町を見にいった．小さな静かな町だ．チリの町には，どんな小さな町にも，プラサという，木々や花壇，噴水のある公園がある．いつも，恋人たち，老人たち，家族づれが憩いをとっている．チリの町の思い出は，その町によって特色のあるプラサの光景と切り離しては考えられないほどだ．

レストランで生うにをたのむと，みかんの袋ほどもある大きなやつがでてきた．

「アギラ」は，翌朝になってもまだ出ない．ひとりの将校にきくと，昼頃には出るだろうと言う．が，昼になっても，夕方になっても，夜になっても出発する気配はない．軍隊といってものんびりしている．およそ定刻どおりということがない．汽車だって30分位のちがいは，ほぼ定刻どおりと取らねばならぬことも，後にあった．

夜の12時すぎ，艦内が寝静まった頃，やっとエンジンの始動が始まった．

12月13日．陸にそって太平洋を南へ向けて走っていた「アギラ」は，東に向きをかえ，チロエ島と大陸の間の海峡に入った．両岸は50 mほどの海岸段丘になっており，上部はなだらかな草原と森林がひろがっている．やがて，チリの鉄道の南の最終点(パン・アメリカン・ハイウェイの終点)プエルト・モントの入江へと，向きをとる．が，町の港へははいらず，すぐ近くの，なにもない入江へ突入し，海岸ぎりぎりまで乗りあげた．なにごとかと思って，艦首へいって見る．5人の

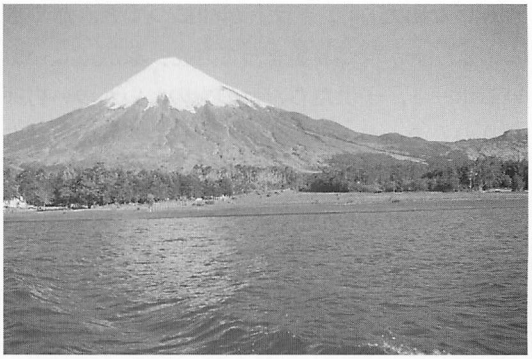

図2——「チリ富士」と呼ばれる美しいオソルノ火山(2652 m).
プエルト・モント沖の軍艦「アギラ」艦上から撮影.

日本人らしき顔が，海岸の道路上に見えるではないか．六甲学院(神戸)の登山隊パーティ*3だ．

阪上秀太郎隊長をのぞく4人が艦上に上がってきた．日本以来，久々の面々だ．艦上は，一挙に10人の日本人であふれた．

その夜は，その入江に停泊した．寒々とした雨の降るなかに，雲の中に頭をかくしたチリ富士といわれるオソルノ火山(図2)が，小さな氷河をいだいて見えている．生まれてはじめて見る氷河だ．

錯雑した諸島地帯へ

12月14日．「アギラ」は，チロエ島に付属した，小さな島のアチャオという小港にたちよった．まるで童話にでてくるような，小ぢんまりした，

*3 井上治郎とぼくは，神戸の六甲学院のOBで，在校時，山岳部員でもあった．その山岳部員OBの集まりである六甲学院山岳会が，パタゴニア遠征の計画をたてたことを，ぼくは，まだ学生3人だけで走りまわっていた頃，知った．それ以来，つねに，六甲パーティとは連絡をとっていた．ある意味では競争だった．かれらの目的は，南パタゴニア氷陸(氷原)を横断することだ．かれらが横断なら，こちらは学術調査で対抗しよう．是が非でも実現させねば．そんな気負いにもなっていた．みんなよく知っている連中だし，行く場所も，時期も，ほとんど同じだったので，協力できることはやっていこうということで，出発までつねに連絡をとってきた．

かれらには，六甲学院がカトリック系ということで，連絡を取りつけたひとりのチリ人神父がいた．かれは，現地プエルト・エデンで数年来，宣教活動をしている．が，海にかこまれたへき地だけに，布教活動用に新しくモーターボートを購入しようとしていた．ちょうど，日本から六甲隊が来るということで，かれらに日本製モーターボート購入，持参を依頼した．そこで，六甲隊はヤマハの大型グラスファイバーボートを持参した．そのモーターボートは，ぼくたち持参のモーターボートでは困難な調査行には，神父同行で使用させてもらえるということも，すでに日本で決まっていた．

きれいな町だ.「アギラ」が沖につくと，たくさんのボートが群がり集まってきた．家族でこいでいるボート，子供たちだけのもの，いかつい男ばかりのもの．どのボートも，チローテ式のこぎ方をしている(チローテとはチロエ島に住む人々のこと)．ふつう，ボートは，すわってオールを引いて動かす．が，チローテ式は，進行方向にむかって立ち，オールを押してボートを動かすのだ．

「アギラ」にまつわりついたボートから，続々と働きざかりの男どもが上がってきた．200人はいそうだ．かれらは夏の間，さいはてのプンタ・アレナス付近の羊の大牧場へ働きに出かけるのだ．2〜3カ月は会えぬであろう夫や父，息子を見送りに，年よりから子どもまで，ボートで見送りにきている．1カ月に1度あるかなしかの船以外，なんの交通もなく，しかも，荒涼としたチリ・パタゴニアの自然を背景としたこの「出かせぎ」の情景に，ぼくは，「人間くさい」パタゴニアを感じた．

やがて，船はチロエ島をすぎ，チョノス諸島にかかった．次から次へと，まわりに小島が現われては，後方に去っている．どの島も海辺までびっしりと樹木が生えている．一番卓越しているのは，ノトファグス(チリブナ)という木で，ちょっと見ると，盆栽の松のような枝ぶりだ．この光景は日本の松島に似てるとある者は言う．海も静かで，アンデス山脈の末端の山なみは，すでに低い．が，氷河らしき白いものが，山々の間に多く見えだした．いよいよ南へ来たという感じだ．夜も，10時頃まではまだ明るい．

夜，士官食堂で，ひとりの将校と雑談していた時，ぼくは給仕係の水兵にビーノを頼んだ．が，どうも水兵の様子がおかしい．怠気(たいぎ)そうに瓶とグラスをそろえ，フラフラしながら運んでくる．手も小きざみにふるえている．ガチャンと瓶をたおす．ようやく持ってきた彼に，将校は「もう休め」といやな顔をして言う．アル中だ．その将校は言う．「チリは，まだまだ貧しい人が多く，物価も高い．が，ビーノだけは別だ．ばかみたいに安くて，しかも，とてもうまい．当然，貧しいものはビーノばかり飲んでいる．昼も，夜も．いまやアル中は，チリの大きな社会問題となっている．兵隊の中にもたくさんいる．彼も，この航海が終ったら病院行きだ」．あんなにひどいアル中患者を軍務につかせるチリという国の呑気さと，そんなことはいっておれないほど蔓延化しているアル中をかかえた悩みを，ぼくはのぞきみた．

12月15日．船はタイタオ半島をう回するため，細くなった水路を一たん西へ進み，太平洋に出る．夜は，将校たちが，10人の日本人のため，お別れパーティを開いてくれた．ペンキをまぜたマヨネーズやケチャップで大皿の上につくった，日の丸とチリ国旗がテーブルにかざられた．ビーノ，ブランデー，ピスコ(しょうちゅうに似た蒸留酒)など酒ぜめだ．英語，スペイン語，日本語おりまぜての，にぎやかな夜となった．酔いざましに甲板に出ると，パタゴニア特有の，岩肌をすべっと出したタイタオ半島の山々が，波しぶきのむこうに，ボーッとかすんで見えていた．はじめて，実感をこめて，ぼくの口から出てきた．「地のはて，パタゴニア！」

夜半，船はその名のごとくもっとも外洋の荒波にもまれるペニャス湾(ペニャスとは苦悩という意味)に入っていった．

プエルト・エデン

12月16日．起きてみると，「アギラ」はふたたびウェリントン島と大陸の間の静かな水道に入っていた．やがて，昼頃，プエルト・エデンの小入江に入っていった．島の岸辺には，バンガローのような小屋がいくつかならんでいる．そして，投錨．高いアンテナ塔のたつ，空軍の気象観測所から，あるいは，ここに居つく漁師の小屋からたくさんのボートが集まってくる．艦上もにわかに活気づく．やってきたボートから上を見上げる顔はみな黒っぽくすすけている．中には，日本で調べている頃からどんな人たちかと思いめぐらしていた，モンゴロイド系の原住民，アラカルーフ*4

*4 最近，現地を訪れた山本紀夫氏(民族学博物館)によると，現在では，彼らの自称である“Kawésqar”(カワシュカル)という呼び方に戻っており，この名称は使われてい

の顔がある．かれらは，チョルガという貝や，草であんだ簡単なカゴなどを，乗客や乗組の水兵に売りにきたのだ．あちこちで，なまのチョルガ(ムール貝の一種)をナイフでこじあけて，レモンをかけて必死になって食っている．乗り込んできた漁師やアラカルーフが甲板を右往左往する．空軍の人たちとあいさつを交す．船の旅で親しくなった人たちに別れのあいさつをする．ぼくたちの装備をおろす水兵たちを見にいく．あわただしく艦内を走りまわって，やがてぼくも，「アギラ」をはなれる．重たい木箱は，多くの水兵たちが，ハアハアいいながら空軍の建物まで運んでくれる．

やがて，「アギラ」は，ボーッと汽笛をならし，水道を南へと消えていった．

夜は，ゆでたチョルガが山のように出た．

これから，滞在中泊めてもらうのは，プエルト・エデンの空軍の気象観測所兼無線中継所の建物で，空軍ポストとよばれている(図3)．ここには常時，数人の空軍の軍人が勤務し，寝とまりしている．1年単位の勤務だが，途中，たいていは休暇をとって1〜2カ月間家族のいるプンタ・アレナス等に帰っている．今は，所長のトローさん，炊事係のマテオさん衛生兵のファン・パヴェスさんの3人だ．それに，つい最近はじまった小学校の校長先生一家(ゴンザレス先生，ベルタ夫人，

ない．ちなみに，Kawésqar とはスペイン語の gente，つまり人を意味している．

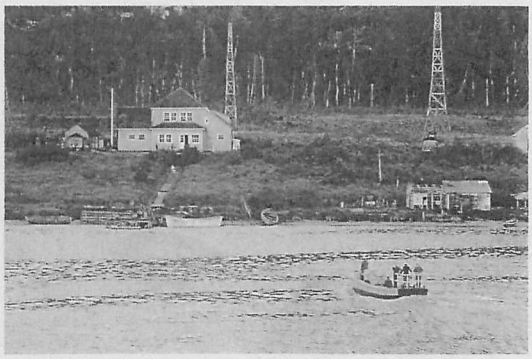

図3——ウェリントン島プエルト・エデンのチリ空軍観測所(ポスト)．

娘のマリソル，息子のカリート)も同居している．小学校といっても，空軍ポストの横にある小屋に，プエルト・エデン一帯の漁師やアラカルーフの子供たちをあつめて教えるのである．小屋は，日曜日には教会に早がわりする．

空軍のポストは，チリ南部諸島で唯一の人間居住地であるプエルト・エデンの住民にとって，重大な役割をはたしている．不足物資の補給，郵便物の出入り，船の入港予定等の情報，病人や負傷者の手当，住民間のいざこざの仲介，教育．すべて，このポストの軍人が役目をつとめる．チリ最南部の，もっとも空白な地帯の気象データをとるという主任務の重要性は言うまでもない．

2階建のポストの建物に，10人の日本人(京大隊と六甲隊)が加わり，チリ人と日本人のにぎやかな共同生活がはじまった．建物内の広間や廊下は，2つの隊の装備でうめつくされてしまった．